

## 朝の蜻蛉

著者	菅，半作
雑誌名	龍南
巻	1 9 9
ページ	7 5 - 7 6
発行年	1926-11-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8886">http://hdl.handle.net/2298/8886</a>

# 朝の蜻蛉

菅

半

作

朝の間の露を深みか草むらに羽根をぬらしてとまれる蜻蛉トビ

雨ばれのたけの土はやはらかしわがぬく蕨の音のよろしさ

雨はれてあした明るき芋ばたにこもれる雀飛び立ちにけり

芋畑にいまだも残る夕明り心わびしみ立ち居たりけり

松原の中にこの頃道出来て朝よりそこを人通る見ゆ

病氣の父を家に残して唯ひとり今日古閑山に登り來にけり

古閑山の眞晝ひそけし茸狩りの村の子供と行き會ひにけり

心なごみゆふべは歸る山原道土堀り女ひとり居にけり

朝の蜻蛉(管)

一人

雁廻ガクワイの空を流るゝ白雲の光り明るく雨はれんとす

## 春の頃

すく／＼と新芽出揃ゾロふ松山に啼く晝虫の聲ひそかなり

新芽立つ小野の萩原あゆみをれば心はとみに明るくなれり

このゆふべ雨ははれつゝうらやすし羊齒シダの若葉のひらきそめたる